

東北大学病院 化学療法センター

令和3年2月5日発行

Contents

- P1 ごあいさつ
- P2 外来患者さんへの新しい取り組み
- P3 化学療法中の口腔管理
- P4 がんサロン『ゆい』

News
Letter
No.26



* ごあいさつ

安心、安全な外来化学療法をめざして

化学療法センター 看護師長 合澤 美幸



今年度、化学療法センターに配属となり1年になろうとしています。化学療法センターは、患者さんが安心して安全に外来化学療法を受けられるよう、化学療法に関する専門的な知識と技術が必要なだけではなく、医師、看護師、薬剤師など多職種での協力と、きめ細やかな配慮が必要なところであることを実感しています。

当センターは、年々治療件数が増加しており、令和元年度は年間14,973件と、10年前と比べると約6,000件増加となっています。患者数の増加に合わせ、2年前からベッド数を35床に増設し、1日60～90件近くの治療を行っています。がん化学療法認定看護師1名を含む11名の看護師が、常に2人一組のペアで、患者さんの情報を共有し、薬剤の確認、血管確保、薬剤投与を行います。薬剤師と毎日ミーティングを行い、患者さんひとりひとりの治療歴や病状、アレルギー歴、身体的な情報などを確認し、安全に治療ができるように気を配っています。患者さんには「治療手帳」をお渡しし、日々の体調を記録していただいています。「治療手帳」を通して、患者さんの体調の変化や薬剤による副作用の出現に早期に気づき、副作用による苦痛が最小限になるよう医師へ相談したり、在宅でのセルフケアの支援を行っています。また、脱毛、皮膚や爪の障害など、外見に現れる副作用に対してのケア方法を提供し、患者さんが安心して外来治療を継続できるようサポートしています。

化学療法センターでの一番の課題、それは患者さんの待ち時間です。患者数が増加していることもあり、徐々に待ち時間が長くなっています。ITセンターと協力して

データを検証し、予約時間に偏りがないように予約数の分散化、業務の見直し等、看護師、医師、薬剤師の多職種で検討し改善に向けて努力しているところです。

また、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大で患者さんも不安な思いで通院されていると思います。化学療法センターでは、患者さんに安心してご利用いただけるように、3密にならないように待合室を分けたり、看護師の感染対策の徹底や体調管理のほか、患者さんにもマスクの着用や待合室以外での待機などご協力をいただけております。ご不便をおかけすることもあるかと思いますが、患者さんの安全のために今後も感染症対策を継続して参りたいと思います。

これからも、私たちは、患者さんが安心して外来化学療法を受けながら、患者さんそれが自分らしい生活を送れるよう支援し、安全な医療の提供に日々努力していきたいと思います。



* 回光(えこう)：禅語の「回光返照(えこうへんじょう)」に由来します。

回光返照：自らの光を外へ向けるのではなく、内なる自分へ向けて、心の中を照らし出し、自分自身を省みること。

* 外来患者さんへの新しい取り組み

薬剤部 齋藤 究

薬剤部では化学療法センターでがん化学療法を受ける患者さんへの治療の質向上を目的として、令和2年10月より新しい取り組みを開始しました。新型コロナウイルスの感染拡大防止のため薬剤師による患者指導を一時中断していますが、一部の患者さんに対しこれまでとは異なる指導を行っています。

一つは治療期間全般に渡る継続した面談を実施しています。これまで、主に化学療法センターで初めてがん化学療法を開始する患者さんや、治療方法が変更される患者さんを対象に、治療スケジュール、使用薬剤の作用と予想される副作用と、副作用発現時の対処法を中心に説明していました。薬剤師の面談が治療初期に偏っていたため、治療の進行に伴って生じる副作用の状況を継続的に把握することは困難でしたが、現在は化学療法センターでの治療の都度副作用の発現状況や支持療法の効果を確認し、必要に応じて医師へ薬物治療の提案を行っています。治療内容について不明な点や相談がございましたら、いつでも薬剤師にお声がけください。

二つ目は、化学療法センターでお渡ししている治療手帳（図1A）を活用した保険調剤薬局との連携強化です。患者さんが実施しているがん治療のプロトコール名と実施状況、治療当日の抗がん薬の投与量、内服抗がん薬併用の場合にはその用法用量、投与量に変更があった場合にはその理由、面談時に聴取した副作用発現状況、その他医学・薬学的管理上必要な事項をシールに印刷し（図2）、面談時にお預かりした治療手帳に貼付し、治療終了までに患者さんへお返します。この治療手帳を保険調剤薬局の窓口にご提示いただくことで、薬局の薬剤師は処方された抗がん薬や、制吐薬などの支持療法に関する説明、副作用発現状況の確認などを行うことができます。さらにご自宅での副作用発現状況などを電話で確認するなど、かかりつけ薬剤師として患者さんの継続的なフォローアップに努め、必要に応じて当院の医師や薬剤師と情報を共有することでよりきめ細やかな治療管理に取り組むことができます。

近年、患者さんの生活の質の向上や医療費削減の観点から、がん治療は入院から外来へシフトしています。新しい内服抗がん薬の登場や、点滴と内服抗がん薬を併用する治療の登場、制吐薬等の支持療法の多様化がこうした流れを促進していますが、一方で質が高く安全な医療を患者さんへ提供するには、病院薬剤師と院外処方せんを取り扱う保険調剤薬局の薬剤師の連携が重要となっています。

現在、こうした取り組みは点滴による抗がん薬と内服の抗がん薬を併用した治療を受けている腫瘍内科の患者さんに実施していますが、今後は対象を他の診療科に拡大し、より多くの患者さんに広げていく予定です。

このような取り組みにより、より質の高い医療を提供できるよう努めてまいりますので、患者さんには情報提供の文書を記載した治療手帳を必ず保険調剤薬局へご提示いただき、当院と保険調剤薬局間の治療情報の共有にご協力をお願いします。また、治療手帳には日々の体重や体温、体調を記入する欄がありまので（図1B）、お薬手帳と合わせて日々の治療にもお役立てください。



図1A 治療手帳表紙

図1B 治療手帳記入例

図2 治療手帳に記載する情報

* 化学療法中の口腔管理

百々 美奈^{1,2}、丹田 奈緒子^{1,2}、石河 理沙^{1,2}、加藤 翼^{1,2}、小関 健由^{1,2}、飯久保 正弘²

1 ; 予防歯科、2 ; 周術期口腔支援センター

東北大学病院歯科部門では、周術期口腔支援センターを窓口として、がん治療をはじめとした様々な医科治療中の口腔管理を行っています。化学療法中の患者さんの中には「がんの治療をするのにどうして歯科へ紹介されたのか」と疑問に思われていた方もいます。一見すると関係の薄そうな歯科と化学療法ですが、化学療法中に口腔管理を行うことは、とても重要な意味があります。

がん治療における化学療法では、様々な副作用（有害事象）が全身に現れることがあり、それは口腔にも現れます。例えば、口の中が荒れる（口内炎）、口が乾く、味がしない、歯肉が腫れる、カンジダやヘルペスといった感染症がおきる、などが挙げられます。この中でも特に口内炎は、悪化すると継続した痛みに悩まされ食事をすることも難しくなるなど、治療中のQOLを大きく低下させ、重症化の程度によっては治療を中断しなければならないこともあります。がん治療の効果にも影響してきます。他にも、むし歯や歯周炎があると、化学療法による免疫低下に伴い痛みが生じることがあり、がん治療の妨げとなることがあります。

また近年、骨転移に対する治療として骨吸収抑制剤（ゾメタ、ランマークなど）を使用することができます。疼痛の軽減や骨折の予防などメリットの多い薬ですが、口腔では顎の骨に炎症が生じる『顎骨壊死』という病気を引き起こしてしまうことがあります。作用機序が未だ不明であり根本的な治療方法が確立されていないのが現状ですが、感染巣（むし歯や歯周炎など）の存在や抜歯などの歯科治療

化学療法によるお口のトラブル

- 口内炎（口腔粘膜炎）
- 味がしない（味覚異常）
- 口が乾く（口腔乾燥）
- 粘膜の感染（カンジダ・ヘルペス）
- 歯・歯肉の病気
- 歯がしみる（末梢神経障害）

により発症リスクが高くなるとされています。この顎骨壊死を防ぐためには、骨吸収抑制剤の使用前には歯科受診を行い、治療の必要があるときには抜歯などの歯科治療を完了したうえで投薬を開始することを推奨しています。

このように、化学療法中に口腔管理を行うことは、がん治療を進めていく上でとても重要です。また、むし歯や歯周炎などが多く、日頃から口腔内の健康が適切に保たれていると、スムーズにがん治療を開始でき、治療中のお口のトラブルも少ないことが多いことから、定期的な歯科受診を行い、普段からお口の健康を保っていただけたらと思います。

歯科部門では令和3年度から、化学療法中の口腔管理を多く担っていた「予防歯科」は「口腔支持療法科」へ、医科部門の患者様の紹介窓口として機能していた「周術期口腔支援センター」は「周術期口腔健康管理部」へと改名し、より一層、医科歯科連携を強化し、がん治療における口腔管理を推進する改組が進行しています。歯科部門では、これからも治療前から自身での適切なケア方法をお伝えし、専門スタッフによるケアを行うことで、口腔の副作用の発症や重症化を防ぎ、がん治療をスムーズに進めることができるようサポートしていきます。また、化学療法中や治療後には、その内容によっては歯科治療に制限が生じる場合もありますが、安心して歯科治療を受け、お口の健康を保てるよう、地域の歯科医院とも連携し支援していくので、気軽に相談ください。



歯科部門で作成している口腔管理についてのパンフレット

* がんサロン『ゆい』

がん診療相談室 がん専門相談員 油井 美紀

東北大学病院は、平成18年度に都道府県がん診療拠点病院の指定を受けてがんセンターが設置され、がん診療相談室（がん相談支援センター）が開設されました。当初よりがん患者さんとご家族向けのイベントを開催しておりましたが、平成23年度「がんサロン『ゆい』」として、がん診療相談室にサロンスペースを設けました。

『ゆい』は、小さな集落で、一人で行うには多大な費用や労力が必要な作業を集落の住民が助け合い、協力し合う精神で成り立つ制度を「結い」と呼ぶことから名付けられました。がんを体験した患者さんとご家族が孤立せず、「悩んでいるのは自分ひとりではない」「同じような問題を抱えている人が他にもいる」ことを知り、つらい体験や気持ちを共有し、支えあう、ピアサポート（ピアは同じ体験をした仲間のことです）の場を目指しています。

がんサロン『ゆい』には、近況をお話しにきたという方、絵手紙やどんぐりのオブジェを届けてくれたりする方がいらっしゃいます。作る方も見る方も楽しんでいただければ何よりです。

がんサロン『ゆい』では、毎月ピアソポーターを変えた茶話会や専門職による講話を開催しています。

茶話会は、がんの種類を問わず、悩みや体験を自由に話すことができる場です。毎回10人～15人の参加者のうち5人前後は「初めまして」の方です。女性が多いですが、男性の仲間も増えてきました。院外の方やご家族が



参加されることもあります。暖かく優しい空気のなか、会話が弾んで時間が足りなくなることもしばしば…そんな会です。

講話は、医師や看護師、薬剤師、栄養士など東北大学病院の専門職がお話をします。知識を深めるだけでなく、いつもは「ゆっくり話したくても話せない」講師に質問をしたり相談したりする時間を設けています。

今年は、残念ながら新型コロナウイルスの影響でお休みせざるを得ない状況が続いているが、皆さんに安心してご利用いただけるよう工夫して再開したいと考えています。

「誰かと話したい…」そんなときはぜひ気負わずにちょっと立ち寄ってみてください。

*編集後記

東北大学病院腫瘍内科 医師 大内 康太



当センターでは、医療の質向上に積極的に取り組んでおります。薬剤部では治療手帳の改訂や継続した面談を実施しており、今回化学療法中の口腔管理についてご寄稿を頂いた歯科を含めた多診療科での連携、がんサロン「ゆい」との共同での催事など、よりよいがん治療の実現に向けてさらに努力を続けていく所存です。

今年に入っても新型コロナウイルス感染症の影響が続いており、当センターで治療を受けられている患者さんにお

かれましても、不安な日々を過ごされていることと存じます。当センターでは冒頭の合澤師長のご挨拶もありました通り、皆様に安心して治療を受けて頂けるよう、様々な取り組みを行っております。患者さんにおかれましては、引き続き問診票の記入や待機場所等でご負担をおかけいたしますが、何卒ご理解とご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

●編集・発行 東北大学病院 化学療法センター

〒980-8574 仙台市青葉区星陵町1-1 Tel: 022-717-7876 FAX: 022-717-7603

編集委員 大内康太（医師）、齋藤 究（薬剤師）、合澤美幸（師長）、高橋友貴子（看護師）、佐藤みちよ（看護師）

ご意見・ご要望がございましたら、化学療法センターまでお寄せください。